

2012年度卒業研究

自由学園らしい放課後の過ごし方の研究

—JIYUアフタースクールのあり方について考える—

メンバー：浅野 隆 植田 駿 才川天平 高柳紗登美
中筋文子 西尾衣澄 宮本悠太 八鉦和希
指導教員：咲花昭嗣 酒本絵梨子

本研究は設立されたばかりのJIYUアフタースクールを対象に、子どもと家庭と学童の関係性を考察し、主に参与観察を用いて、JIYUアフタースクールにおける学生の役割や、指導の方法、プログラムの在り方、そして自由学園のJIYUアフタースクールを含んだ一貫教育の在り方を考察し、今後のJIYUアフタースクールの発展のために提案を行うものである。

1. はじめに

1-1 研究の背景

1970年代半ば以降、女性の労働力率が上昇に転じ、女性が自分の人生を選択できるような社会の中で、その労働力を求める社会のニーズとも合致して、社会進出が進んでいる。そして、女性の社会進出にともない、子どものいる家庭における共働きの割合が増加している。

自由学園初等部においても、近年共働き家庭が増加し、学校が終わってからの時間、習い事を預け場所として利用したり、親と家で落ち着いて過ごしたりする時間が減っていることなどが問題となっている。

このような社会的背景を受けて、自由学園初等部の児童の放課後の時間の充実、そして、自由学園の女性教員が安心して働ける環境づくりをまずは大きなねらいとして、2012年度からJIYUアフタースクールは設立された。

1-2 研究の目的

人間形成と教育ゼミの学生は、主にボランティア学生スタッフとして参加してきたが、「自由学園のアフタースクール」として、より良いアフタースクールにしていくにはさまざまな視点からの取り組みが必要である。スタッフとして、子ども

と接する中で見えてきた課題を5つのテーマから研究し、今後の自由学園の放課後の過ごし方の一つとして、JIYUアフタースクールへ提案をしたい。

2. JIYUアフタースクールの役割-家庭とJIYUアフタースクールの関係に焦点を当てて(高柳紗登美・八鉦和希)

2-1 研究の目的

JIYUアフタースクールと学校、家庭の関係性、役割を一週間の時間調べと記述式アンケート調査を行い、JIYUアフタースクール設立前のアンケートと比較し、考察する。

2-2 結果と考察

JIYUアフタースクールが設立する前の初等部では、共働きか共働きでないかという違いによって、同居している保護者と過ごす時間や習い事の時間・数に大きな差はなかった。

記述式アンケートからは子どもたちが遊べない事へのストレスを感じていたことがわかった。それと同時に、「子どもを好きなだけ遊ばせてあげられない」「一緒にゆっくりと過ごす余裕がない」ということを保護者は葛藤も分かる。それに対し、JIYUアフタースクールが設立後は、子ども

もは遊ぶことへのストレスを感じなくなり、保護者も安心して預けられ、安心して働けるようになったことが、アンケート結果から伺える。しかし、一方では遅くまで預けられるようになったことで安心して働けるが、帰ってきてからの生活が窮屈になったという記述もある。

保護者の意見が両極端であるのには、JIYUアフタースクールでの過ごし方が子どもによって個人差があること、設立前と後の生活リズムの変化が大きい子どもとあまり変化のない子どもがいることなどがあることが考えられる。

時間調べの比較からは、JIYUアフタースクールに子どもを預けられるようになったことで帰宅時間が遅くなり、それに伴い、就寝時間も遅くなっていることがわかった。初等部ではパット寝を励んでおり20時に就寝することを目標としているが、家に帰ってから寝るまでの時間が減り、疲れが溜まってしまう原因の一つになっている可能性がある。

2-3 結論

子どもの生活リズムのためには、JIYUアフタースクールで過ごす時間だけを充実させるのではなく、帰ってからの家での生活、次の日の学校での生活、一日の生活の流れまで考えることが重要である。また、JIYUアフタースクールが頻繁に地域との交流を持つことで、地域の方々が見守ってくれるという新しい関係を作っていくことで、安心したアフタースクールが作れるだろう。

3. JIYUアフタースクールにおける学生スタッフの役割 (植田駿)

3-1 研究の目的

JIYUアフタースクールに関わる学生スタッフの役割について、参与観察とフィールドノートを用いて考察する。

3-2 結果と考察

子ども同士では男子と女子で分かれて遊ぶことが多いが学生スタッフが入ると男女で遊ぶことも出来る。

また、子どもにとって学生スタッフは先生と認識されていない。だが子どもが先生に注意されたが聞かなかったのに対し、学生スタッフが注意すると子どもは注意を聞くことがある。先生という

立場ではなく子どもに近いお兄さんやお姉さんという立場の者が言った事で聞き入れたのではないかと考えられる。

3-3 結論

先生でも子どもでもないという曖昧な存在であることで、遊び相手という役割だけではなく、先生の役割とを行き来できるのである。今後は学童保育だけではなく、学童保育に行っていない初等部の子どもや地域の子ども達への学生スタッフになる事が望まれる。

4. JIYUアフタースクールにおける美術ワークショップの指導法の考察 (才川天平 中筋文子 西尾衣澄)

4-1 研究の目的

JIYUアフタースクールの学童保育に通っている異年齢かつワークショップを目的としていない集団を対象に、どのようにワークショップを行なったらよいか、その指導法に焦点を当て、プログラムの実施とそのフィールドノートから考察する。

4-2 結果と考察

導入部分では子どもの興味をいかにしてひくかということがポイントになる。導入部分で集中して話をきき、興味を持つことでそのあとの作業を積極的に行うことが出来る。

作業内容としては、子どもにとってわかりやすいということ、子どもの好きな作業が含まれているということ、強制的にしないということがポイントとなる。また作業の自由度が高すぎると子どもが戸惑ってしまいこちらの望む結果が得られないことが多い。完成のイメージを持てるような枠組みを準備する必要がある。

4-3 結論

上述の考察から JIYU アフタースクールで美術系ワークショップを行ううえで重要なことを4点にまとめた。

- ・ 強制させないこと
- ・ 高学年を中心とすること
- ・ ある程度の枠と完成のイメージ
- ・ ゴールが見える作業

ワークショップは、子ども達の中で興味関心が広がっていき、新しい経験をするきっかけである。

上記の4点に配慮しつつ、学生による様々なワークショップが行われることが望まれる。

5. JIYUアフタースクールにおけるより良い間食の提案-「自由学園の食の学びを」を活かして- (浅野隆)

5-1 研究の目的

フィールドノートによる考察から、自由学園の食の学びを活かした JIYU アフタースクールのよりよい間食の提案をする。

5-2 結果と考察

自由学園の食の学びのサイクルは、「味わう」「始末する」「育てる」「整える」である。このようなサイクルの中を JIYU アフタースクールに全てを取り入れることは現状では難しい、そこで、初等部での食の学びを考慮に入れ、児童が JIYU アフタースクールに帰ってきてから間食の時間までは1時間で可能な「育てる」「整える」に焦点を当て、さつま芋掘り、クレープ作りプログラムを実施した。

プログラムの参与観察から以下の工夫の必要なポイントを提案する。

- ・ 児童に自主性を持たせる
- ・ 児童に付き添うスタッフの数
- ・ プログラムのメインのモノとは別にサブのものを準備する
- ・ 普段実現しにくいプログラムを実行する
- ・ 児童一人の分量を区分けする

6. JIYU アフタースクールを通して自由学園の一貫教育を活性化させるシステムの考察 (宮本悠太)

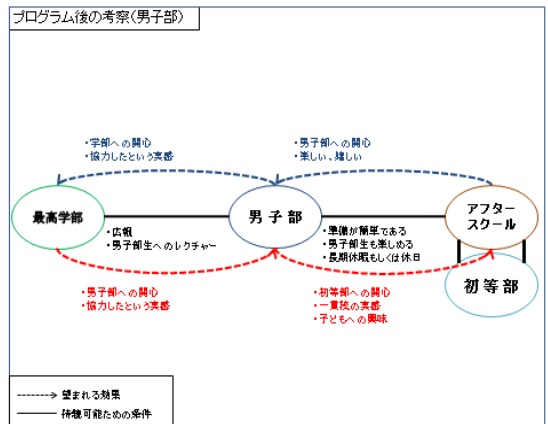
6-1 研究の目的

JIYU アフタースクールを通して自由学園の一貫教育の活性化ができるシステムの提案をする。

6-2 結果と考察

前提として、A部はB部への理解がある。これは、例えば、最高学部がA部だと、B部を女子部だと仮定したときに、最高学部は女子部に対して、基本生活を乱さない範囲であり、長期休み、又は解散後である。女子部生の普段の生活のことへの理解という前提を指す。次に、JIYUアフタースクールを通して、A部がB部に関わりを持つ。

関わりを持つことで、B部はA部に理解や関心を持つ。その理解や関心が進学者増加に繋がる可能性もある。B部は関わりを持った後にフィードバックをする。このフィードバックは、アンケートや、子どもたちへの感想、各部の教師会の反応などを指す。そしてそのフィードバックが改善された関わりとなる。このシステムの大きな特徴として、必ず男子部・女子部と初等部との間に最高学部が入っていることが挙げられる。これは、現段階では、最高学部が企画、運営や、各部間の窓口という役割を担っているからである。基本時間を大切にしておき、なかなか自由な時間のない男子部と女子部の生徒が、日々の生活の中で企画から実施まで移すことは難しいであろう。初期段階では最高学部生が必ず介入することが妥当だと考える。これにより、最高学部が各部の間に入ることになり、必然的に3部間の循環が生まれることになる。



図：

男子部とアフタースクールの関わりシステムまた、JIYUアフタースクールは地域とのつながりを大切にしている。例えば、しのめ寮、アフタースクールで定期的に行われているマルシェに男子部、女子部が手伝いとして参加することで、地域との繋がりも生まれ、将来的に女子部、男子部の生徒が直接地域と繋がる可能性も考えられる。

6-3 結論

上述のシステムを稼働するために最も大切なのは起動源である。現在は、このシステムの起

動源が人間形成と教育ゼミのメンバーであり、最終的には参加する学生・生徒のやる気や関心などの心理的な側面に頼っていることが指摘できる。例えば、来年以降に、人間形成と教育のメンバーが、JIYU アフタースクールに対して積極的なアプローチをしなかった場合、このシステムは上手く稼働しない。そこで、こういった課題に左右されないシステムを提案する。

案① 最高学部内で係をつくる。

案② A 各部で係をつくる。

案③ B 1年生必修講義である「生涯発達論」でJIYU アフタースクールの実習をする。

案④ C 自主研究グループの発足

案⑤ D 学園特別実習「JIYU アフタースクール」の発足

上述のようなシステムで運用する場合、学生の参加の希望やゼミの希望などの主体性を重んじていないような印象も受けるが、最高学部のカリキュラムとして、だれもが教育の現場に立つということは実学としても重要な学びだといえるだろう。

7. まとめと提案

上述の個人研究をまとめると、「プログラム」、「学生の参加」、「各年代との関わり」という3つの点が共通している。

「プログラム」においては美術のワークショップや自由学園の食の学びを活かしたプログラムなど、自由学園らしいプログラムを行うことで、JIYU アフタースクールと自由学園をつなぐ役割を持ち、さらには自由学園と地域をつなぐ役割を担うだろう。

また、これらのプログラムの企画・運営や、学童保育には「学生の参加」が望まれる。JIYU アフタースクールを利用する児童にとっても、植田の学生スタッフの役割に関する研究で明らかにしたように、経験の幅を広げる重要な役割がある。また、学生にとっても社会に働きかけるきっかけとなる。

そして、このような学生が関わりを持ち、プログラムを通して、「各年代の関わり」が生まれる。この関わりを密にすることで、自由学園の縦のつながりと、地域とのつながりを広げることができるだろう。

最後に、今回の研究では大きく取り上げられなかったが、子どもと親が安心して楽しめる環境を作るためにも、地域とのつながりは重要な点である。地域の人々の関わりを深めていくことは、良い地域づくりという社会への働きかけをする自由学園の使命を果たす起点にもなるだろう。

[主要参考文献]

梶木典子・瀬渡章子・田中智子 (2000)

「プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価「プレイスクール」における調査事例」日本家政学会誌 Vol. 51, No. 6, pp. 497-508

羽仁もと子(1950)『羽仁もと子著作集 第18巻 教育三十年』婦人之友社

村瀬浩二・落合優 (2007) 「子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因: 世代間を比較して」
体育学研究 p. 52, pp. 187-200

ローウェンフェルド, V: 竹内清他訳 (1995)『美術による人間形成 創造的発達と精神的成長』黎明書房